撮影場所◎山形大学小白川キャンパス

# 奏（かな）であう人 vol.65

## 山形から世界に挑戦

山形の自然と山を愛し、世界の高峰に挑み続ける飯澤さん、約30年にわたりナスカ地上絵の研究・保護に努める坂井さん。山形を拠点に世界へ挑むお二人にお話をお聞きしました。

### 坂井正人（さかい まさと）さん（山形市）

昭和38年生まれ。千葉県出身、山形市在住。山形大学人文社会科学部教授、専門は文化人類学・アンデス考古学。東京大学大学院在学中にペルー共和国ナスカ台地の地上絵研究を始める。2004年から山形大学で発足した「ナスカ地上絵プロジェクトチーム」の中心を担う。以後、新しい地上絵を次々と発見。2012年にナスカ市に開設した「ナスカ研究所」の副所長を兼務し、地上絵の調査・研究、保護・活用、教育に努める。

ペルー共和国ナスカ市に、2012年に開所した「山形大学ナスカ研究所」。ペルー文化省と“地上絵の学術研究と保護に関する特別協定”を締結している。現在、ナスカ台地の地上絵調査を許可されているのは、世界で山形大学のみ。ほぼ毎年、渡航して現地調査を行うとともに、近年はAIやドローンを活用した研究を進めている。

### 飯澤 政人（いいざわ まさと）さん（東根市）

昭和60年生まれ。天童市出身、東根市在住。登山ガイド、山岳フォトグラファー。20歳から登山を始め、2018年、東北6県や新潟県のメンバーで組織する「北日本海外登山研究会」の隊員としてK2（8611m）登頂に挑戦し、山形県人として初めて成功。2021年にはヒマラヤの鋭鋒アマ・ダブラム（6812m）初挑戦で登頂を果たす。その様子を撮影したドキュメンタリー番組を制作し、冒険家としての新境地を開く。

山登りを始めてから11年後の2018年7月22日、K2登頂を果たした瞬間。達成感以上に、家族や友人たちが待つ山形へ「やっと帰れる」という思いが強かったという。同時に「この絶景と感動を多くの人に伝えたい」と感じ、アマ・ダブラムでのドキュメント映像制作につながった。



### 自分の生き方を決める ライフワークとの出会い

標高世界第2位のK2に続き、アマ・ダブラムへの登頂を果たした飯澤さん。そのきっかけは、地元天童の里山、水晶山（668m）だったと言います。

「山野草の撮影が目的で登ったのですが、山頂に着いたときの達成感、広がる眺望に魅せられ山のとりこになりました。同時に、いつかは世界へという夢が芽生えました」。

それ以来、冬山を含め、国内の山々を登ってトレーニングを重ね、技術を磨いていったそうです。

「山が自分を成長させてくれると感じ、まるで憑かれたかのように山に登りたいの一心でした。K2登頂も、失敗しても3回は挑戦するつもりでした。行かない、諦めるという選択肢はありませんでした」。

坂井さんは、飯澤さんの一途さに共感してこう応えます。

「何かを始めるきっかけは、思い付きや、たまたまなどいくつもありますが、これだと決めたらずっと継続できるかどうかが大事です。そういう点では、私も似ています」。

坂井さんのナスカ地上絵との本格的な出会いは1993年。当時、地上絵の保護活動の第一人者だったドイツのマリア・ライヘさんに協力してもらい、地上絵に関する予備調査を実施したことが始まりでした。

「ナスカ台地は、東西20km×南北15kmと広大で、全体を把握する調査が困難なため、地上絵の分布状況が十分に解明されていませんでした。山形大学の研究チームが2004年から画像分析と現地調査によって、動物や植物などの具象的な地上絵を190点発見しました」。

### 地上絵や山を通して、人やその営みに触れる

坂井さんが言葉を続けます。

「新発見ばかりが話題になりますが、見つけることが目的ではありません。地上絵がいつ作られ、どのような目的で利用されたのかについて明らかにするとともに、当時はどのような自然環境であったのかについて考察することに関心があります。

また、文字を持たなかったアンデス文明において、コミュニケーション手段の一つだったと考えられる地上絵は、その種類や作られ方で当時の信仰や農耕のあり方、人々の価値観や暮らしを知ることができます。

これらが、ナスカ地上絵に魅了され続けている理由です」。

飯澤さんもまた、海外遠征時に現地でお世話になったシェルパ※との交流を通して、そこに暮らす人々への思いが強くなったと話します。

「今回、アマ・ダブラム登頂を決行したのは、コロナ禍で仕事が激減している現地エージェントやスタッフの方々に、少しでも収入をと考えたからです。もちろん、出国・入国手続きなど大変でしたし、感染対策にも苦心しましたが、コロナに限らず災害や障害はいつだって起こり得ます。困難があるからといってひるんでいては何もできない、そんな思いでした」。

来年夏には、世界一美しいとされるペルーのアルパマヨ山から、スイスのマッターホルン、アイガーを回るグループ登山を計画。自然景観や登山の様子だけでなく、その土地の人々と触れ合いなども、写真を通して多くの人に伝えたいと話します。

### 冒険や研究の拠点として 山形は大切な場所

飯澤さんは、生きて帰りたいと強く思える故郷があるから、難関に挑むことができると強調します。

「自分を育ててくれた山形の山には、穏やかさと優しさ、力強さが同居している感じがします。頑張るエネルギーを与えてくれる存在ですね」。

「それは、山形人の人柄そのものでもあるんでしょうね」と坂井さん。

「ペルー山形県人会の皆さんも、故郷をとても大切に思っていて、現地研究所の設立に尽力いただきました。また、私たちが長年にわたって研究に没頭できているのは、山形の豊かで充実した自然環境、生活環境があってこそだと思っています」。

「今年は8月に『山の日』全国大会が蔵王で開催されます。この機会に、山形の山の魅力を、感謝を込めて発信していきたいですね」と、飯澤さんが登山家らしく締めてくれました。

※「シェルパ」とは、ネパールの少数民族の一つ。同時に、ヒマラヤの山々で荷物運びや案内人（登山ガイド）を生業としている人々を指す言葉。